短編

冬森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編

【Ｎコード】

Ｎ３４７７Ｚ

【作者名】

冬森

【あらすじ】

自分のサイトで書いた作品を出来次第、投稿しています。

一番偉い奴

烏天狗の彼は、くすんだ黒髪と濁った黒目の男の子。睨んでいるように見えるから、同い年の仲間にはすぐ逃げられる。だからいつも一人ぼっち。

そんな彼は、小さな黒い烏羽根と白いぼんぼんの付いた着物を羽織、今日も朱色の門の上でぼんやりと空を眺めている。

そんな彼には最近楽しみな事がある。それは人間のこども。彼を妖怪だ、と言って騒ぎ、時には石を投げる人間のこども。けれど最近、彼を門の上から退かした奴が一番偉い奴、という遊びとも言えないものがこども達の間中で流行っているらしい。彼の下にやって来たこども達はそれぞれの「烏天狗を退かす方法」を持って来る。

例えばそれは暴力。石を投げて追い出そうとするのだ。けれど彼には小さいながらも葉っぱのうちわがある。上下に一回振るだけで、飛んで来た石は弾き飛ばされた。

例えばそれは嘘。「その門の上に座っているとタコ入道にパックン、と食われちまうぞ！」と言う。残念ながら彼はタコ入道を見た事があるから、自分は、食べられはしないさ。と鼻で笑った。

例えばそれは賄賂。「これはおいらの宝物さ。これを君にあげるから一寸門の上から降りてくれ。」とキラキラ輝くガラス玉を見せる子がいた。確かにそれはとても綺麗で欲しいと思う。けれどその子は簡単に宝物をあげるというから、それは本当に大切な宝物ではないのだろう、と断った。

人間のこども達はひどく焦った。誰も烏天狗を門の上から下ろせない。一番偉い奴も決まらない。そんな子ども達を眺めながら彼はにやにやしていた。自分が何かするたびにこども達は慌てふためき

騒ぐのかと思うと、それはすごい優越感や支配欲に繋がった。よし、もっともっと遊んでやろう。と、彼は門の上で考えた。

けれどそんな烏天狗の下に、一人のこどもがやって来た。そいつは片手をあげて「やあ、」と軽く挨拶をすると、始終にこにこと笑いながら烏天狗を見上げるだけ。それが一刻も続いたら気持ち悪くなってきた。彼は眉をすぼめながら「何だよ。」とそいつに言った。そいつは「どう？」と意味のわからない言葉を吐いてから、烏天狗に石を投げた。次いで「その門の上にいるとタコ入道に食われちまうぞ。」と言った。何だ、こいつは。と、彼がそいつをジッと見た時、彼は懐からガラス玉を取り出して「おれの宝物をあげるから、一寸門の上から下りてよ。」と、やはり笑顔で言った。そいつは彼が何か言う前に「ま、おれの宝物じゃあないんだけどね。」と言ってガラス玉を放り投げた。「いてっ」という声からして、きっと周りにこども達がいるのだろう。ちらりと周りに広がる草陰を見遣れば、がさっと鳴った。そしてそんな彼に気づかず、ここからが本題だというようにそいつは言った。「実は、烏天狗を門の上から退かした奴が一番偉いっていう遊びを広めたのはおれなんだ。お前と話してみたくてね。どうだい騙されたと思って一寸下りてきなよ。」

彼はすぐにそれを嘘だと見抜き、「嫌だね。」と鼻を鳴らした。そんな烏天狗にそいつはしまったなぁ。という表情で頭を掻きながら「じゃあ、いい。」と言った。諦めたのか。と、そいつを見た彼は、目の前の光景に目を見開いた。漆塗りのされた滑りやすい柱にしがみついて、上ろうとするそいつがいたのだ。「おれがそっちに行ってやるさ。」と言ったそいつは、本当にずるずると上って来た。けれどそれも柱の半分まで行ったところでそいつが足を滑らせたことで終わった。「わっ。」というそいつの声と、ポーンと空に飛んだそいつの体。思わず彼は側に置いていたうちわで風を送ろうとするも、自分の小さなうちわでは距離が全く届かない。そうしている間にもそいつは地面へと、どんどん落ちていく。周りでこっそり隠れてのぞいていたこども達が「大変だ！」「お父ちゃん呼んでくる

！」と騒いでいる。ああ、どうしよう。そう思いながら、彼は立ちあがって自身のくすんだ黒い羽根を広げ、門の上から飛び下りた。

結局、そいつは彼に助けられた。けれどそいつは、笑顔で言ったのだった。

「やった！　おれが一番偉い奴！」

彼女の日常

川に、草履を脱いで裸足で入る少女がいた。
足裏から感じるごろごろした石の感覚を楽しみながら、彼女は軽く川面を蹴って遊んでいる。そうやって一日が過ぎるのを待つのが彼女の日常だった。

そんな彼女の日常に、一匹の猫が加わった。二つの尾を持つその猫曰く「自分は猫又だ」だそうだ。猫又は強気で脅すように彼女に言ったが、彼女にとってそれは人間が「私は泥棒だ」と言うのと同じような物だった。尻尾を立てて威嚇するように歯を見せて唸る猫又に、彼女は「へえ、そうなの」と答えた。だから猫又は彼女に興味を持った。

彼女と猫又が川辺で昼寝をしていると、一羽の烏が飛んで来た。三つの目を持つ烏曰く「俺はヤタガラスだ」だそうだ。気味の悪い鳴き声と鋭い嘴で彼女の周りを旋回するが、彼女にとってそれは春先に「ここは自分の縄張りだ」と鳴いて回るスズメのような物だった。だから彼女は「へえ、そうなの」と言った。だからヤタガラスは彼女に興味を持った。

秋になると、山の上の和尚さまの処に行くのが彼女の日常だった。今回はそれに、二つの尾を持つ猫又と、三つの目を持つヤタガラスがいるだけだ。山の中腹の辺りで「おい」と呼び止められた彼女は誰だろうかと辺りを見回す。猫又とヤタガラスは何故か身を竦めて彼女の影に隠れた。一体どうしたのだろうか。と彼女が首を傾げると、道の両端に鎮座する二体の狛犬が彼女を睨んできた。

「此処は八神様の御社に通じる道ぞ」

「邪気を連れて入るでない」

二匹の狛犬は首に付けた大きな数珠から青い炎を出しながら彼女

を追い出そうと一歩ずつ近寄ってくる。影に隠れた一匹と一羽はその圧迫に震えていたが、彼女にとってそれは近所の口煩い親父と一緒だった。だから彼女は「ああ、ごめんなさい」と言った。けれど影に隠れた一匹と一羽を、どうにか出来るほど彼女は賢くなければ特異でもなかった。だから彼女は「一寸御免」と言って狛犬を放って再び山を登り出した。彼女と猫又とヤタガラスと、どうにか引き止めようと後を着いて来る狛犬二匹は和尚さまのいる八神寺の門をくぐった。八神寺の和尚さまは彼女と猫又とヤタガラスと二匹の狛犬を見て「おや、」と呟くと楽しそうに笑った。

「何ぞ、今回もいっぱい連れて来たものだ。」

彼女は何の事だろうかと首を捻りながらも「こんにちは、和尚さま。」と言った。

昔、人間ではないモノに好かれる少女がいた。少女は、和尚に扮した一人の神様に大層好かれながら、一年経つと記憶を忘れる奇異な存在だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3477z/

短編

2011年12月11日22時59分発行